

2022. 11. 20 (日) 使徒6 : 1～4

6:1 そのころ、弟子の数が増えるにつれて、ギリシア語を使うユダヤ人たちから、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情が出た。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給においてなおざりにされていたからである。

6:2 そこで、十二人は弟子たち全員を呼び集めてこう言った。「私たちが神のことばを後回しにして、食卓のことに仕えるのは良くありません。

6:3 そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たちを七人選びなさい。その人たちにこの務めを任せることにして、

6:4 私たちは祈りと、みことばの奉仕に専念します。」

<説教>

これまで「使徒の働き」と題されたルカの記録によって私たちはエルサレムで始まった新約の初代教会の姿を見て、学んで来ました。

イエスは聖霊降臨の約束をしてくださいました。イエスの約束どおりに聖霊が使徒たち、弟子たちの上に降り、初代キリスト教会による「イエスの証人」としての働き、務めが始まりました。使徒ペテロの説教によって三千人ほどが教会に加えられました。彼らは使徒たちの教えを守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていました。一切の物を共有し、財産や所有物を売って、それぞれの必要に応じて分配していました。

神殿で使徒ペテロとヨハネが生まれつき足の不自由をイエスの御名によって癒やし立たせたことを発端として大祭司たちサドカイ派を中心としたユダヤ人権威者による妨害が始まりました。「誰にもイエスの名によって語ったり教えたりしてはならない」という命令をペテロとヨハネは拒みました。教会はますます熱心に祈り、ますます聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語るようになりました。

彼らは〈みな一つになって、一切の物を共有し、財産や所有物を売っては、それぞれの必要に応じて、皆に分配して〉(2:44,45)いました。〈彼らの中には、一人も乏しい者がいなかった。地所や家を所有している者はみな、それを売り、その代金を持って来て、使徒たちの足もとに置いた。その金が、必要に応じてそれぞれに分け与えられた〉(4:34,35)のです。

そんな中で、悪魔も働き、アナニヤとサツピラの事件が起りましたが、教会はそれに正しく対処し、一層神の御前に恐れをもって歩むようになりました。そしてさらに〈主を信じる者たちはますます増え、男も女も大勢になった〉(5:14)のでした。

するとねたみに燃えた大祭司たちサドカイ人たちによる妨害が再び起き、使徒たちは捕らえられ、最高法院の場に引き出されました。しかし使徒たちは「人に従うより、神に従うべきです。」と再び最高法院の命令を拒み、〈毎日、宮や家々でイエスがキリストであると教え、宣べ伝えることをやめなかった〉(5:42)のです。

そのようにして〈弟子の数が増え〉て行きました。その中で、教会の中のある問題が明らかになってきました。〈弟子〉とはここでは使徒たち〈十二人〉を除いたエルサレム教会の信徒たちということになります。おそらく彼らのほとんどは〈ギリシア語を使うユダヤ人たち〉(直訳「ヘレニストたち」 cf.11:20)か〈ヘブル語を使うユダヤ人たち〉(直訳

「ヘブル人たち」) のどちらかだったのでしょう。「ヘブル人」とはユダヤ人で、先祖伝来の〈ヘブル語を使う〉、考え方も昔ながらのユダヤ風の人々です。一方「ヘレニスト」とは、ここではユダヤ人だけ、外国育ちで、ヘブル語ではなく〈ギリシア語を使う〉、考えもギリシア文化の影響を大きく受けている人々でした。それが今は祖国に帰って来てエルサレムに住んでいたということでしょう。それで、おそらくは、〈弟子の数が植えるにつれて〉言葉の違いが一番の原因となってお互いの意思疎通がうまくいかなくなっていたのでしょう。そんな「しわよせ」が、特に弱い(経済的にも肉体的にも)立場だった〈やもめたち〉に集中して〈毎日の配給においてなおざりにされていた(放っておかれた、後回しのようにされていた)〉のでしょう。〈毎日の配給〉とは、地所や家を所有していた弟子たちがそれを売って、その代金を持って来て使徒たちの足もとに置いた、その金をそれぞれの必要に応じて分配されることです(4:34,35)。その〈配給〉の〈奉仕〉をそのときは、代金を足もとに置かれた十二人の使徒たちがしていたのです。しかもそれは〈毎日〉のことでした。それで、〈十二人は弟子たち全員を呼び集めてこう言った。「私たちが神のことばを後回しにして、食卓のことに仕えるのは良くありません。そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たちを七人選びなさい。その人たちにこの務めを任せることにして、私たちは祈りと、みことばの奉仕に専念します。』〉(6:2-4)ということになったのです。

〈ギリシア語を使うユダヤ人たち〉から出た〈苦情〉を受けて、使徒たちは気が付きました。「自分たちがしてきたことは、善いことであり、喜んでしてきたことではあった。しかしその結果『私たちが神のことばを後回しにして、食卓のことに仕える』ことになっていた。それは神の御前に『良くない』こと、神のみこころにかなわず、神に喜ばれないことだった。」と。彼らはそう反省し、悔い改めたのです。そして、改めて聖霊を求め、神に知恵を求めて祈ったに違いありません。そして自分たちの最優先すべきことは〈祈りとみことばの奉仕に専念〉することだと確認したのです。

と同時に、〈やもめたち〉を筆頭とする人々にお金や物や食べ物を毎日配給して、乏しい者が一人もいないようにすること、〈食卓のことに仕える〉ことも神のみこころにかなない、神に喜ばれることとして教会がなすべき〈奉仕〉〈務め〉であるということも確認したに違いありません。ただその〈奉仕〉をも自分たちが「兼任」していたが故に、十分に果たせていなかったことも認め、悔い改めたのです。それで自分たちとは別の新たな〈奉仕〉者を教会の〈弟子たち〉〈兄弟たち〉の中から選び、任命して彼らにその〈務めを任せることにし) たのです。

このように教会には神の御前でなすべき〈奉仕〉〈務め〉があります。〈祈りと、みことばの奉仕〉も、〈毎日の配給〉〈食卓のことに仕える〉奉仕も、どちらも大切な〈奉仕〉です。そしてこれは「全体」としてする〈奉仕〉〈務め〉だということはできます。しかし使徒たちはそれらを全部自分たちだけで担おうとしてしまった過ちに気が付きました。〈苦情が出た〉ことを切っ掛けに、それらは皆で分担しあわなければならないことに気が付きました。教会はキリストをかしらとする、キリストのからだですから、兄弟姉妹たちそれぞれが、からだの器官として果たすべき、かしらなるキリストによって召された働き、つまり〈奉仕〉〈務め〉がまたあるのです。自らの思いや今既に行っている奉仕を改めて省み、主イエス・キリストのみこころにかなって務めを果たしていきたいと願います。